

合奏練習

鎌倉フルートアンサンブルと名前だけはプロ顔負けの同好会の発表会が次の土曜日、五月十六日にあるものだから、直前の日曜日の午後にはたっぷり時間をとって合奏の練習をしましょうという申し合わせで、中央公民館の音楽室を一時から五時まで借りてあった。

今年になって練習を始めたシュトラウスの「美しき青きドナウ」がとんでもなく難しく、二十五人のメンバーのうち誰一人として満足に吹ける者が居らず、だから当然の結果として四部に分かれたどのパートも、まともな音を出せないまま今日まで来てしまった。粒の揃った音を創って並べるのも難しい上に、行ったり来たり複雑な反復記号の連発で曲そのものが恐ろしく長い。

この曲、上手な演奏を聴いていると綺麗な旋律が入れ替わり立ち代り現れて楽しいけれど、演奏してみると反復々々で一向に終わらないので、中年のおばさん楽団は疲れてしまつて息切れがするのである。

そろそろワルツをひとつやってみたらと、指導してくださる内田先生から楽譜を渡されたのはかれこれ二年ぐらい前のことで、それ以来演奏会やら発表会は何度もあり、その度に皆で一寸吹いて見たりしたのだけれどもまるで音楽にならなかつた。それで、今の我々の技量では到底歯が立たないと誰しも諦めていたのが、この三月の世話人交代の時の話し合いでまたしても、やってみなければいつまで経っても出来るようにはならない、再度挑戦すべしという主戦論が台頭した。

今度の発表会はさいわいなことに内輪の「おさらい会」で聴衆もパラパラの筈だから、失敗覚悟でやってみようという勇ましい意見が出て、内心無理ダヨナアと皆思いつつ大勢ならぬ大声順応で結局やってみる事になった。聴衆パラパラなら失敗しないかというところ、そんなリクツはないし、「パラパラ アガラナイ 本来の技量を上回る演奏をやつてのける」という法則はなおさらないのだけれど、そこはそれ、客席に知人は居ないと思うとなしる気が楽である。じゃあ、正式の演奏会は常に満員の盛況かというところ、動員令に呼ぶるサクラの人数は同じだから客席の埋まり具合は似たようなものであるが。

聴衆パラパラであるのが、何かの間違いでギッシリになるのが、とにかくステージに上がって吹く度胸をつけるにはこれを稽古台にしてやるしかない、まるで肝試しでもやるような具合になって二ヶ月。予期した通り欧州大陸伝統の三拍子は、私達農耕民族の骨の髄まで沁み込んでいる田植え唄の二拍子とはなかなか合わない。

サクラの皆さんには毎度ご迷惑をおかけしますが、今度も稽古台代わりになっていただきましょつ。

降りしきる雨の中、集まったのは僅かに六人、全員集合は期待もしてないがそれにしても少ない。

しかし、毎週火曜日夜の定例練習では頭部管を吹くだけのいわゆる「音出し」から始めるので、他の曲の練習もあるし、時間が足らなくて「ドナウ」はせいぜい二回ぐらいしか、通しての演奏しか出来ないのに、今日は「ドナウ」だけに集中することが出来た。それに小人数の気安さで自分のパートの出来ない所を繰り返して合わせて貰うことが出来て、皆満足であった。

プロならこれだけの練習で、本番ではちゃんと合わせてしまふのだからうけれど、素人の悲しさで、だからといって突然素敵な音が出るようになったわけではない。まあ、どこで音を出すのかキツカケを掴めたという程度の低レベルの話である。

主旋律を吹いているパートの独習には別に困難は無いが、それに従っている他のパートの場合、全体の中で自分の音がどんな具合に鳴るべきかが判らないと、独習は難しい。やたら休止符があったり、それにリズムが「後打ち」であったりすると特にそうである。

やっぱり家で独りで練習するよりもこうして集まって自主練習をやってよかった。これが独奏だったらとてもステージに上がる度胸は無いけれど、全員合奏ならなんとかなりそうになった、皆でやれば怖くないなどと少しばかり浮かれた気分になって話しながら、雨の上がった鎌倉駅前解散した。時計塔の文字盤にもう灯が入ってちょうど五時。